防災・減災のページ

むすび塾

被災体験 積極発信を

巡回ワークショップ　@宮城・女川町女川中

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は1日、宮城県女川町の女川中で巡回ワークショップ「むすび塾」を開いた。東北以外の開催も含めて通算25回目。2、3年生の計10人が参加した。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、震災の経験や避難の大切さを後世に伝えるため、どんなことができるのか話し合った。

震災の経験や避難の大切さを後世に伝示する。そのための決意を新たにした生徒たち

女川中では震災以降、3年生が災害に強いまちづくりに向けた方策を考えてきた。震災の伝承は活動の柱の一つで、募金を集め、津波到達地点に石碑を建てる計画を進めている。

女川町では震災の大津波で800人近い住民が犠牲になっている。なぜ、せずに逃げる習慣を身に付ける―「安全な場所にどんどん逃げて」と呼び掛けた。

「記録・残す」などの提言も町の至る所にちらばっている。

学校での取り組み　津波到達点付近に石碑建立

宮城県女川町の女川中は生徒数202人。3年生は「100年先の命を守る」という目標を掲げ、募金を集めて津波到達点付近に石碑を建てる「いのちの石碑プロジェクト」を進めている。津波被害の軽減策として「高台へ避難できる町づくり」を管理することは、指導所が確認できるだけでなく、防災意識の向上にも繋がっている。

宮城県女川町の女川中は生徒一人一人が喜びをもってカードを掲げ、「いのち」を守る意識を高めるため、被災体験や復興への思いを俳句に詠む取り組みも続ける。

学校では、下校時に学校からの帰宅にもつながっている。

もしもの場合に取るべき行動について、普段から考えさせようと、6月には抜き打ちで避難訓練を行った。震災を忘れないためにも、被災体験や復興への思いを俳句に詠む取り組みも続ける。

震災の経験や避難の大切さを後世に伝示する。そのための決意を新たにした生徒たち

話し合いに加わった本ネットワーク三宅島（東京）代表の皆戸加奈さん（44）は、1983年、2000年の三宅島（東京都三宅村）噴火の災害原状の取り組み説明、遺構を残し、噴火災害の実態を積極的に発信する意義について「自分の命を守る大切さも一緒に伝えている」と語った。

3年生は震災の伝承をけん引してきた。その活動の継承も重要な課題となった。2年生は「先輩の取り組みをしっかり受け継ぎたい」「さらに充実させるため、アイデアも出す」と力強く意思表示。明、3年生は「苦しいこともいろいろとやる大変なことがあるが、だいぶ慣れてきた。震災の伝承は、町の魅力をつくりだす存在であり、上手に付き合うことが大事だ。震災害の怖さの一方で、町は素晴らしい場所だなんてことも忘れず、東北工大の福留邦洋准教授（地域計画）は一自然は時に厳しさを見せる。だからこそ、楽しみもある。

アドバイザーを務めた東北工大の福留邦洋准教授（地域計画）は、震災の教訓や津波の怖さ、住民の人間性、地域の魅力を合わせて伝えていくことが大切だろう。

地域の魅力も一緒に伝えよう

東北工大准教授（地域計画）
福留　邦洋さん

非常用の持ち出し袋を用意している家庭が多かった。基本的な備蓄品のほかに自分には何が必要かも考えておくといい。眼鏡や薬など、ほかの人から見たら重要でなくとも、その人にとってはかけがえのない物がある。

自宅から持ち出すだけでなく、あらかじめ安全な場所に備えておくのもアイデアだ。女川中は高台にある。学校に置いておけば、持ち出す余裕がない時でもちゅうちょせずに避難できる。

同じ震災を経験しても感じ方は一人一人違う。津波対策の活動をしてきた3年生から話を聞いて感じた。

2年生は3年生の取り組みを参考にしながら、自分たちなりの防災・減災対策や伝え方を考えていけばいいと思う。

情報発信には、人それぞれ表現方法がある。みなさんの話を聞いていると、女川のことが好きな人が多くて、頼もしく思った。自然と共存して暮らすためには、震災の教訓や津波の怖さだけでなく、豊かな自然の恵み、住民の人間性、地域の魅力を合わせて伝えていくことが大切だろう。

■むすび塾に参加して――宮城・女川町女川中

【倒れたビル、どうする？】後世の人に震災を伝えるために、残したい。ほかの地域では（遺構を）残さないかもしれないが、女川は女川。防災に関わる活動は、成人まで続ける。＝3年・渡辺滉大君（15）

【震災の教訓】防災・減災は自然と闘うことではなく、共存することで、後世の人によい自然との付き合い方を考えてほしい。2年生が津波対策の活動を引き継いで、新しい案が出てくるのを楽しみにしている。＝2年・木村嵯哉君（15）

【災害への備え】どんなに小さな揺れでも高台に逃げる。震災の2日前に起きた地震の津波は小さなものだった。それで油断した多くの人が、震災当日に逃げずに犠牲になったのではないか。＝3年・山下倩君（14）

【津波で倒れたビル、どうする？】震災を思いだしたくないので、個人的には残してほしくないが、後世の人のために残さなければいけないと思う。説明の看板をけるなど、残す方法をしっかり考えてほしい。＝2年・阿部珠美さん（14）

【家族と話していること】震災直後は、家族から（生々しい）テレビの映像などを「（なるべく）見るな」と言われた。今は家族で見る。母は「映像でも、体験者の話でもいい。絶対に伝えていくべきだ」と話していた。＝2年・佐藤柚希君（14）